



幹事長 井手得郎 昭41年卒

春の幹事会協議事項報告

東日本大震災が起きて一年が過ぎました。東北では復旧・復興に時間が掛かり尚ご苦労の毎日ですが、困難に怯むことなく力強く立ち向かっておられます。過日、NHKの人気番組「鶴瓶の家族に乾杯」でマラソンの高橋尚子さんが大船渡市を訪れ、一年ぶりに再会した漁師の力強い言葉に大変感動いたしました。

「われわれは津波で被害を受けたが、海から恩恵もたくさん貰った。これからも海と共に生きていきたい」
未曾有の災害に晒された一年でしたが、これほどまでに人々の絆が試されたことがかつてあったでしょう。東北だけでなく、日本全体が一つになって、「絆」という言葉を合言葉に、人々は被災者に心を寄せあい、復興への道を模索してきました。震災を期に多くの日本人の意識が変わり始めたように感じます。

われわれ竹田高校関東同窓会も、郷里の先輩後輩の絆を深め、力強い繋がりを持った同窓会として、活動の場を広げていきたいと考えています。

同窓会の動き

平成24年2月21日、日本パークライジング本社会議室で役員会を開催。収支報告、維持会員の



大分県立竹田高等学校
関東同窓会
報

第43号

発行者・会長 松良修二
編集者・委員長 田部修士
発行所・関東同窓会事務局
〒245-0016
横浜市泉区和泉町4384-2
電話 045-803-5677

<http://www.geocities.jp/kantohaketa/>

状況、若手会員の勧誘方法などについて討議が行われた。

3月24日、市ヶ谷アルカディアにて会長以下役員及び学年幹事が出席し、春の定例幹事会を開催。今年の総会懇親会の開催要領について協議、会場の運営並びに催し物について確認がされました。

以下、役員会及び幹事会での討議概要、

一、平成23年度決算報告

平成23年度の総会収支、維持会費収支の説明があった。本年三期末までの収支実績が確定後、監事の監査を受け、総会で承認を得ることの報告があり、満場一致で承認されました。

二、修学旅行研修支援

12月7日、恒例の母校修学旅行の企業研修に在京の卒業生8人が引率協力をした。地下鉄のラッシュに巻き込まれるグループがあったが、大きな事故もなく無事企業見学を終えた。訪問企業はロッテ本社(新宿区)、DHC(さいたま市)、トヨタメガウエブ(江東区)、森永乳業(東大和市)、パナソニック(江東区)、キャノン(港

三、第26回総会・懇親会開催

総会・懇親会は同窓会活動の集大成であることを肝に銘じ、役員及び当番幹事一同力を合わせて万全を期したい。今年の総会は6月16日(土)に東京プリンスホテルのプロビデンスホールでの開催が決定されました。郷土料理のだんご汁も準備し、故郷の食を楽しんでいただく考えです。催し物は、大分在住で昭和53年卒のフォークグループ「TAKE・out」の出演を企画しました。



四、会員の維持・拡充

同窓会は1860人に案内状を送付している。平成23年9月30日現在、維持会員数458人で、本年度は13人増であった。同窓会活動を積極的に展開していくためには、維持会員を増やすことが重要な課題となっております。

五、お花見の会の開催

3月25日(日)、新宿御苑に有志が集い、開花が待たれる桜の木の下で手料理に舌鼓をうちつつ、故郷談議に花を咲かせました。

六、故郷竹田市および母校との情報交流

今年、故郷竹田市では、岡藩城下町400年祭として様々な活動が計画されています。4月1日岡城桜祭り、5月27日広瀬武夫を偲ぶコンサートや少年柔道大会、サンチャゴの鐘リメイク披露、また、川端康成記念講演会も体育館落成記念と併せて開催されます。

以上の項目についての活発な議論、報告がなされた。また緒方総務委員長から、東日本大震災救援募金として三万円が朝日新聞厚生文化事業団に送られたことも併せて報告されました。

「お世話になりました」

竹高東京修学旅行

2学年主任 大野 真二

(12月の修学旅行の後で大野先生よりお便りを頂きました。)

今回の修学旅行は、同窓会 役員の皆様のご配慮で、生徒達が有意義な研修を行うことができました。

また、生徒達の自覚にみちた行動で大成功であったと思います。

交流会で話のあった「生



(日本橋の東京証券取引所ホールにて。)

竹田は大変寒くなり、今日の気温は1度から氷点下です。それでは、関東の皆様方もお体に気をつけて、よいお年をお迎えください。

日本パーカライジング本社訪問



(里見社長、その他役員と供に。)



(質問する生徒)

竹田の子供達から
プーチン首相への手紙

たくさんの皆様のご支援をもつて第2回目となる「広瀬武夫杯少年柔道大会」が昨年十一月二三日の盛大に開催されました。

この柔道大会は竹田市が生



んだ偉人・広瀬武夫の顕彰と柔道の普及を通じて青少年の健全育成を目指すことから竹田市商工会議所等が中心となって企画されました。

警察研修社の中島様初め、日本文理大学・柔道部の手嶋薫先生、竹田市柔道連盟等、多くの方々のご協力を得て盛大な大会となりました。

さらに大きな大会に育てていくために様々な試みがなされています。

一方、竹田市では広瀬武夫百年記祭を契機にロシアとの交流が進展していますが、この柔道大会にロシアの子供達を招待し、竹田市とロシアの交流を深める一助としたいとの思いから、ロシア大使館の協力も得て、柔道愛好家であるプーチン首相(次期大統領)に子供達から手紙を出す計画がひそかに進められています。写真はその手紙に添え大会の様子を伝える予定のものです。

(田部)

第26回竹田高校関東同窓会 総会と懇親会のご案内

- 日時 平成24年6月16日(土曜日)
- 場所 東京プリンスホテル 2階 プロビデンスホール
東京都港区芝公園3-3-1 TEL 03-3432-1111
- 総会 12時00分～ 会計報告・監査報告等
- 懇親会 13時00分～ (懇親会のみ参加もOK)
- 会費 8,000円

会費義務教育課参事)
メンバーより「伝統ある、関東同窓会」にお招きいただき、誠に光栄です。同窓会の皆様に、心地よいひと時と楽しい思い出をお届けできるよう、メンバー一同、気力・闘志・根性で精一杯頑張ります。よろしくお願い致します。」とメッセージを頂ました。皆で、応援しましょう。

当番幹事…
昭和46年、56年卒



- JR線・東京モノレール浜松町駅から徒歩10分
- 都営地下鉄三田線御成門駅(A1)から徒歩1分
- 都営浅草線大江戸線大門駅(A6)から徒歩7分
- 都営地下鉄大江戸線赤羽橋駅から徒歩7分
- 地下鉄日比谷線神谷町駅(3番)から徒歩10分



懇親会では皆様に高校時代を思い出してもらおうと、フォークソンググループ「TAKE OUT(テイクアウト)」によるミニコンサートを企画しました。TAKE OUTは、竹田高校昭和53年卒業の同級生バンドで、蘇る青春！をコンセプトに結成された働き盛りのグループです。

志賀哲哉さん
(竹田市立久住中学校校長)

和田啓さん
(大分県信用保証協会管理課長)

高山浩昭さん
(津久見市立保土嶋小学校校長)

後藤榮一さん(今回は欠席…大分県教育委員会)

クラス会・同期会

34年卒業しき旅行会

市村 真一 昭34年卒

34年組は、秋になると楽しみがある。関東同窓会の学年幹事を担当した時から皆の希望で秋に旅行会をやっている。今回も竹田から吉崎祥子さんが、神戸から松本絃正君が浜松から麻生和子さんが馳せ参じてくれた。

東京駅、横浜駅、熱海駅に三々五々に16名集合して、伊豆行き特急で鉄道の旅を開始。おしゃべり談笑、早速にビールで乾杯と賑やかさは学生時代に逆戻りである。

今回の目的地「伊豆高原駅」に到着。ギリギリの精進の良さで、雨模様ながら雨に会わず行動できた。伊豆高原駅で一人行方不明事案もでたが大事に至らず観光地の「城が埼海岸」に出掛けた。

城が埼海岸は、4000年前に噴火した溶岩が海に流れ出し、海の侵食作用で削られた海岸で、懐深く入り組んだ岩礁の眺めは壮観でした。その岩礁をつなぐ吊り橋(長さ約50m、高さ約30m)からは、天空からの眺めのようにでした。

壮大な眺めの後は、伊豆の良



竹田高校34年卒伊豆旅行
城ヶ崎「吊り橋」平成23年11月5(土)夕方曇

質な温泉でゆったりと湯を楽しみ、そして夕食です。いつの会でもそうですが、夕食会は楽しく心が癒される一時となりました。2次会はカラオケです。美声蛮声音痴(私)ありで子供に帰りました。そして、3次会。何とか12時には解散。

次の日は、格調高い「池田20世紀美術館」と「オルゴール館」鑑賞でした。池田美術館では館長自らのご案内を頂きラッキーでした。ピカソ、ジャガール、グリス、ムンク等の絵画の実物鑑賞は、絵が分からない物でも芸術を味わえました。

お昼には花より団子で、地の魚の特別海鮮丼を頂き大満足でした。お土産を買いこみ、帰省

の旅につきました。今回の幹事は、津下渥子さんと服部恭一君です。ホントに有難く感謝しながらの同級生の楽しい旅でした。

同窓会は楽しくしなやかに

津田 紀子 昭35年卒

昭和35年に竹田高校を卒業した私たちは、故郷竹田に本部の珊瑚会が、関東地区には会員約80名の関東さんご会があります。卒業当時、おおよそが単身の上京で苦勞する日々、そんな中で仲間と会えば瞬時に高校生の昔に戻り楽しい時間を過ごしたものでした。同期の男性は高度成長の時代の担い手として、女性の多くがそれを支えて暮らす時代でしたので、折々の催しにも、それぞれがその時々に参加するという形で同期会は続けられました。

恩師のご上京、仲間の展覧会、郷土ゆかりの美術展や催し物、ゴルフ、忘年会、新年会と集まる回数は年齢を重ねるごとに多くなってきました。やはり元気で会える時に会っておこうねと言う事でしょう。

そして、故郷竹田では節目ごとに記念の珊瑚会が開催され、一昨年、卒業五十周年記念珊瑚会が終わったところです。

関東地区珊瑚会の過去最大の



に踏み切りました。若者並みのスケジュールを組み、元気に楽しくハワイを楽しみました。立ち寄ったパールハーバーは、開戦の年に生まれた私たちにとって胸の痛むものでした。でも、念願のこの木なんの木(アメリカネムノキ)の薄桃色の花を見ることができ、感激はひとしお。また、最後の夜が10月31日、本場のハロウインを楽しむことが出来よいい記念になりました。

最近ではインターネットで仲間との連帯がはかられています。誘い合せて、絆を深め、今病を得ている友が参加できる日を待ちつつ、これからお互いに体をいたわりながら、楽しくしなやかに同期会が続くことを祈るばかりです。そしてこの度、関東同窓会の副会長になった麻生さんを静かに支える珊瑚会の仲間でありたいと願っています。

ベトナム便り

首藤 康至 昭39年卒

竹田高校を卒業したのは昭和39年(1964年)。48年前のことです。東京の大学に進学し、8年かけて卒業した後、新聞社に入社。主に東南アジアでの取材、報道を16年ほど続けました。

ベトナム南部にあるダラトの計画と建設に参加。2年前に9ホールが完成したのを機に、建設からは手を引き、いまはもっぱらゴルフをして暮らしています。

80年代後半からは、バンコクに居を移し、タイ、ビルマ(ミャンマー)などで活動。90年代初めにベトナムに移りました。

7年ほど前、仕事はリタイヤして、ビルマに移住。ここで余生を送るつもりでした。ところが、ゴルフ気狂いのベトナム人の友人に、「ゴルフ場を作つて、余生は、ゴルフだけをして暮らそう」と、甘いせりふで口説かれ、建設などまったくの素人なのに、ついついその気になって、ベトナムに戻ってきました。そ

して、南部ダラトでのゴルフ場の計画と建設に参加。2年前に9ホールが完成したのを機に、建設からは手を引き、いまはもっぱらゴルフをして暮らしています。

ベトナム南部にあるダラトは、1920年代に、旧宗主国フランスによって、保養地として開発された、海拔1500メートルの高原にある静かな、美しい町です。一面の松林の中に、ちらほらとフランス風ビルが立ち並ぶ光景は、アジアの町とは思えないほどエキゾチックそのもの。久住山が、海拔1787メートルですから、その山頂よりちょっと低い高度に町があると説明すれば、わかりやすいでしょう。

イベントは、2007年10月に全国の仲間呼びかけ横浜グラウンドインターコンチネンタルホテルで「珊瑚会 in 横浜」を開催したことです。80名ほどの仲間と夜景のきれいなホテルで過ごし、中には50年ぶりの再会もあったようです。その時、遠く竹田からご出席くださり、楽しそうにハーモニカを吹いてくださった都留先生が去年お亡くなりになり、横浜でお会いできてよかったです。横濱で思い出しています。

この横浜での珊瑚会を記念した旅行も毎年実施され、近年話題の八ッ場ダムの地を訪れたりもしました。

そしてついに去年、ハワイ旅行が実現しました。東日本を襲った震災は仲間にも少なからず及びましたが、一年がかりで計画したので、思い切って実行

そのため、熱帯にありながら、日中の平均温度25度前後。涼しくて、昼夜の温度差が大きく、野菜の栽培に適しているために、高原野菜や花の産地として有名です。長い間、バンコク、ラングーン(ヤンゴン)、ホーチミン(サイゴン)など、世界でも有数の暑い都会で暮らしてきましたので、ダラトの過ごしやすさは格別です。何しろ、ゴルフをしていても、汗ひとつかかない。ここを、死に場所と決めたゆえんです。

うわけか「ノーエー節」(富士の白雪)が飛び出しました。翌日、「国語」の後藤是美先生が、「三島女郎衆はノーエだなんて、高校生の歌う歌ですか?」と、怒るともなく、誘うでもなく、「困ったもんですな」と、優しく目を細めて、苦笑いしていました。

秋のストームでは、「戦い勝てり」だけでなく、旧制高校の寮歌や「デカンショ節」を歌うのが常でした。何年生の時かははっきりしませんが、どうい

小野相兼先生は、僕の親父も習った、古い「漢文」の先生ですが、授業のたびに、先生手作りのガリ版刷りテキストを作ってきて、毎時間新しい漢詩や例文を題材にして講義を進める厳しい先生でした。僕は、大学では、教養課程で「中国文学」を選択。

歳のせいでしょう。昔話を始めるときりがありません。竹高の懐かしい先生方の思い出を綴って、締めくくりと致しますよう。

しかし、当時大学はストライキ全盛で、僕はそっちのほうで忙しく、講義には一度も出席せず、期末試験の日に初めて、「中国文学」の教室に座ったものです。教授の顔を拝むのも初めて。その老教授が、試験の前に出欠を取りました。いきなり、僕を名指しで、「君、私の講義には一度もこないで、試験だけ受けるつもりかね。講義出席が評価の最低基準。単位はあげません」と叱責されましたが、「追い出すわけには行かないから」と試験だけは受けさせてくれました。



ところが、試験問題は、高校の「漢文」で小野先生に習った漢詩でした。僕は、単位はもらえないものと観念してしましたから、気楽に、思い切り情感

を込めて、漢詩の解釈をして解答。真っ先に教室を飛び出ししました。結果は、自分でもびっくりにしたのですが、「優」でした。あらためて、小野先生の厳しい授業の賜物と感謝し、竹高の授業のレベルはたいしたもんだと、納得したものです。

生物の小代基雅先生は、白衣を着て授業をする、静かな先生でした。2年生か3年生の最後の「生物」の授業。先生は、いきなり黒板に、によるよると二本のらせん状の線を描き、「人間の遺伝子DNAは、2本のらせん状であることが、最近、アメリカのワトソンらによって発見された」と切り出しました。「DNA=デオキシリボ核酸」と言う言葉も、ワトソン博士の名も、その授業で初めて知りました。「この発見によって、人類は初めて、人間は、何から出来てきたのか？ 我々は、何者なのか？ それを突き詰めていく

端緒をつかんだ。「諸君は、われわれ人類が、何者であるのかを極めていく、新しい画期的な時代に育ち、学んでいくのだ。」アメリカのJ・ワトソンらが、DNAに関する論文を発表したのは1956年ごろ。この発見で、ノーベル賞を受賞したのは62年。この「生物」の授業は63年頃のことです。我々は、竹高で、当時の最も先端的な科学の成果を、いち早く教えられたのです。小代先生は、最後の授業を、こう締めくくりました。「諸君は、新しい時代の真っ只中に巣立っていく。学べ！ 学べ！ さらに学べ！ 少年よ、科学的人間たれ！」。大学を出て、長い間ジャーナリズムの世界に身を置きましたが、「科学的人間たれ！」、この言葉を、常に胸に刻み続けたものです。半世紀を経たいまでも、恩師の最後の授業での、この言葉を思い出すたびに、胸が熱くなります。

平成23年度竹田会総会

田部 修士 昭42年卒

11月9日恒例の竹田会がアルカディア市ヶ谷で開催されました。

最初に物故者の方々への黙祷を捧げ、志生野アナウンサーの司会で会が始まった。

里見会長が、前北九州市長・

末吉さん、竹田市首藤市長その来賓の方々への謝意を述べられ、ご挨拶された。

来賓を代表して首藤勝次竹田市長よりご挨拶があった。「開催おめでとうございます。声



元北九州市市長、末吉氏とともに乾杯

特別ゲストとして、春日井市より上京された吉良幸生さん(玉来出身)が挨拶された。5月に竹田を舞台に西南戦争を題材とする時代小説「沈み橋を渡る」を出筆されたが、出版のいきさつや当時様々な思いを抱えながら薩軍に加わった竹田市士族の苦悩などをご披露された。今回関東同窓会・佐藤相談役のお声かけで特別に駆けつけて頂いた元北九州市・末吉市長のご発声で一同乾杯。会食懇談となった。

懇談の途中、警察研修社の中島社長、小林さんのご協力を得てまとめられたDVD映像により、最近の竹田の風景と昭和10年当時の竹田市の無声活動写真が披露された。

また、以前に交換学生として竹田高校に在籍し、剣道も練習した経験を持たれるプリティツ



首藤市長のご挨拶

豊岡で育った。そこには竹田城があり、稲葉川もある。広瀬中佐のご縁で竹田市、岡城に興味を持ち、度々竹田を訪れる機会ができた。多くの人と知り合いになれた。不思議な縁を感じる。」と挨拶された。

最後に、高野睦美さんのピアノ演奏で美しき竹田の歌を合唱、来年の再開を期して閉会となった。



ヒュードルフさん / 里見会長 / アリソンさん

特別寄稿

還暦事始々八段位への挑戦

姫野 純一 昭42年卒



昨年11月に審査を受けた、剣道8段の審査である。残念ながら、不合格。1800名の受審者で合格者は何と14名、合格率は1%にも及ばず、0.7%強。一次審査の合格率でさえ5.6%ほど、日本最難関の試験と言われるのも頷ける。8段審査には一次審査(実技)、二次審査(実技)、そして二次審査にパスすると日本剣道形の審査が行われ、最終合格となる。

一般的には「8段は名誉段位では？」と認識されているが、これは大きな誤りである。剣道の段位制度は、称号と段位からなり、称号には錬士、教師、範師とあり、段位は初段から8段までである。段位は「剣道の技術的力量(精神的要素を含む)」

称号は「これに加える指導力や、職見などを備えた剣道人としての完成度」を示すとされている。

段位審査基準に「8段は、剣道の奥義に通暁、成熟し、技量円熟なる者」で受験資格に「7段受有後10年以上修行し、かつ46歳以上の者」とあり、現在は8段範師が最高位とされている。正に剣道の段位制度は実力を強く反映したもので成り立っている。簡単に言えば、八段範師は信じ難いほど強い!

思い起こせば二年前に還暦を迎え、一念発起。本格的な剣道修練を決意し、8段位獲得を目標とした。8段位挑戦には「最低、年400回以上の稽古」、「上手(うわて)に掛かる苦しい稽古」、「自らを捨て切った稽古」が必要といわれているが、ビジネスの社会に永年身をおいて来た者にとって、それらの条件をクリアするのは至難の業。特に「稽古回数と上手に掛かる稽古」は物理的に大変難しく、何とか解決策はないかと思案、創意工夫。母校慶応義塾大学OB

の稽古会が毎週火曜日と木曜日の夜に行われており、他に土曜・日曜日の稽古場所を捜し求めて行く、それでも稽古回数は100回程度で限界。厳しいが200回の稽古をノルマに課し、一方で不出の名人高野佐三郎、持田盛二先生などの著書や名言を精読し剣道の本質の理解を深める事とした。

面白いもので、熱心に各道場で真剣に稽古を継続的に行っていると、良い先生との出会いや、多くの道場への出稽古の機会を得る事が出来てくる。知らないうちに稽古回数も200回に近づいてくるし、良い先生方に、厳しく苦しい掛かる稽古の回数も飛躍的に増えてくる。

京都に武徳殿と言う武道の旧総本山的な建物が今でも往時の佇まいを残し、専門家や好事家達が熱心に稽古を行っている。



其処では竹田高校の同級生である高橋俊昭君が稽古の指導をしている。彼は既に八段範師であり、京都府警の名誉師範や京都武徳殿の師範等を勤め、全国的にも有名な剣道家である。武徳殿での稽古は質的な要求を十分に満たしてくれる事もあり、年に2~3回は京都に向き指導を頂いている。彼に稽古を願うと心身共に疲労困憊の状態になるが、汗を流した後の第二道場(酒席)では上下の位を離れ、何時も高校時代の思い出話で盛り上がる。彼の紹介で多くの八段範師の先生方にも稽古を頂く機会が格段に増え、剣道の腕前が上がったと最近実感。

剣道界には昇段した際に、稽古を頂いた方々に感謝の意を込め、手拭等の記念品を渡す慣習が、特に高段者にはあるらしい。私は、竹田高校の先輩で元海自幕僚長の古庄さんに「八段に合格したら、面手拭用の『だるま』の絵を描いて下さい」と厚かましくお願いしている。今年合格に係わらず、『だるま絵』をお強請りしたい。古庄さんは、幕僚長としても有名な方だが、達磨絵の世界でも有名で、各種審査会で高い評価を受けている方だ。

真剣に取り組んでいると、色々な機会にも恵まれる。恩師である慶応義塾大学名誉教授の福本修二先生からの推薦もあり、昨年から全日本剣道連盟の

専門委員会の一つである「指導委員会」の委員を拝命。日本の伝統的継承文化である剣道を国内外に正しく継承していく必要性を鑑み、「剣道指導法の基盤再構築・確立」の手伝いをさせて頂いている。70歳前後で日本剣道界の重鎮の八段範師の先生方との、委員会での実技を含めた指導法確立作業は、私にとって何物にも代え難い勉強の場となっている。

大局観に立った剣道の勉強や、稽古の質量を求める日々を過していると、はるか昔に忘れ去っていた剣友との再会や、海外の方々を含め、色々な分野で活躍された剣道愛好者との出会いも有り、交剣知愛を実践している。初対面の方でも、剣を交えるだけで、旧知の仲の様になるから、剣道は不思議な武道である。最近、幼少年剣士達の指導や各種大会の審判を依頼される事も多くなり、結果的には社会貢献となっているのでは?と勝手に思い込んでいる。

一次審査には、一昨年秋と昨年春と連続合格している事もあめげず、健康と、家庭の理解と剣友にも恵まれた環境の下、ドン・キホーテの台詞「男、60歳を過ぎて見る夢こそが、本当の夢」を思い浮かべながらも、八段位獲得に向い、今日も厳しく苦しい稽古を楽しんでいる。

小早川秀秋の悪評と我が縁

志賀 秀教 (昭24年卒)

ふるさと紀行

それにしても、先に触れた史料「豊後国大野荘の研究」(大分大学国史研究室、1965年刊)

私の郷里は、大分県竹田市で、郊外に「荒城の月」の曲で知られる岡城址がある。

私は戦国末期の城主志賀親善の話
を刷り込まれて育った。親善は我が
祖の主君で、その武勇を、親から扇
を打たんばかりに聞かされた。おか
げで私は親善礼賛に染められた。

鳥津軍侵入時に岡城を守ったこと
あるいは秀吉にほめられて感状を
貰ったなど、私は、鼻をうごめかせ
てこんどは妻子に吹いていた。

三十七歳の折、ある史料に遭遇する。
「独り岡城を死守した志賀親善は、
豊後領主大友吉統が秀吉から除国さ
れた時、支城の岡城を離れ流転の後、
慶長六年(1601)、福島正則に
仕え、翌年、小早川秀秋家臣に転じ、
秀秋没と同じころ病死した。」

裏切り者の悪評にまみれた秀秋
に、我が祖の主君が仕えていたこと
をつゆ知らずにきた私の鼻は見事に
へし折られた。

問い質す肉親すでに亡く、しおれ
た心にむち打ち、史料の謎を追跡し
て現在にいたった。

その間、親善がキリシタンで、宣
教師らに豊後のドン・パウロ(「完
訳フロイス日本史」中公文庫
2000年刊)とはやされていたこ
とや福島正則(「レオン・パジェス日
本切支丹宗門史」岩波文庫1991
年刊)が親善に近づいた傍証も得た。

には、親善がキリシタンに関わる明
記がなく、親からも聞いていない。
敗戦後暫く知らなかった事にも謎を
感じている。

古文書ひとつ読めないもどかしさ
を抱えて、孫引き、曾孫引き、の一
般書にしがみついて謎解きをするし
かほかに手立てはなかった。

あるとき、司馬遼太郎の「金吾中
納言」(「豊臣家の人々シリーズ」)で
妙な挿入文が目についた。司馬が、
独特の軽やかさで秀秋の悪評伝承を
なぞる語りに、「秀吉正妻ねねの実
家二軒だけが徳川大名として明治ま
で続いたのには、奇妙だが理由があ
る」との文が入っていた。ねね(後
の高台院)に生家(木下)と養子先
(浅野)の二軒あって、その二軒だけ
が生き残り、しかもそれに理由があ
るといふ。成程秀吉血縁絶無なもの
改めて謎を感じた。

六十歳も半ば過ぎの頃、司馬挿入
文の補完ともいふべき説に出合っ
た。司馬は自分で「奇妙だが理由が
ある」と持ち出しておきながら作品
内に理由を示さぬまま逝ったのであ
る。

超飛躍的解釈、と断る出宮徳尚は
岡山市教育委員会(1996年)の
職にある日本史研究の士であった。
三千四百字に及ぶ論を荒っぽく縮
めてみる。

「徳川政権は、秀秋を、木下家存

続の代償、その他高度で多様な要因
に基づき、ねね及び木下家などに因
果を含めて暗殺した。その後、暗殺
正当化のために悪評を創作し、幕藩
体制下の忠義観の許で、裏切り者の
末路の因果応報譚として流布された」
私は失礼を顧みず、書状で教えを
乞うた。

「……。志賀親善宛の知行目録(慶
長七年(1602)九月三日付 写)
は、秀秋とその公事方共に、一ヶ月
後の横死を予想すらしい、当然の
執政の一環と理解されます。むしろ、
秀秋の乱行譚と相入れないノーマル
な執政を示す資料で、暗殺の仮設の
状況証拠とも見えます……」の返事
を頂いた。

志賀親善がキリシタンだった事実
と出宮説に加え、更にいくつかの資
料に基づく私の仮説も交えて次のよ
うな推定にいたった。

関ヶ原で徳川氏は大勝したとはい
え、大阪城の豊臣秀頼は健在であり、
海外からの南蛮、(スペイン・ポル
トガルなど、カトリック、旧教)そ
して半世紀後来日(臼杵沖漂着とす
る)の紅毛(オランダ・イギリスな
ど、プロテスタント、新教)といっ
た二大潮流にも気が許せなかった。
政権基盤がまだ固まらぬ徳川氏
は、交易について、南蛮と紅毛を暫
く競り合わせていた。

一方、西国衆(秀吉恩顧大名)は
秀頼を戴いて徳川氏に力を示さんと
機を窺い、その中心に二十歳の若武
者小早川秀秋がいた。

西国衆の動きにあせった徳川氏

は、秀秋近親に因果を含めた上で
早々に(慶長七年=1602 十月
上旬)彼を消した。場所は多分大阪
屋敷だろう。さて暗殺したものもの死
亡の大義名分が定まらなかった。秀
秋の南蛮接近は西国衆の大半も行っ
ていたし、徳川氏は南蛮と紅毛双方
を競わせてもいたので、秀秋の南蛮
寄りを誅殺理由にし難く、更に書状
での秀秋との約束、即ち関ヶ原勝利
の恩賞は所領倍増の話どころか秀忠
と同等の処遇、をも家康は迫られて
いたのだった。

かかる複雑な絡みのめどは、御用
学者天海、崇伝、羅山三人のうち最
年少二十五歳の林羅山(慶長十年=
1605入關)の機智で見事に片付
いた。彼は、旧来の陋習に塗れた武
者言葉を棄て去り、新しい造語によ
る愚民洗脳統治政策に秀秋横死の援
用を目論んだ。一挙両得だ。「武士」
という言葉が古典から掘出し旧来の
「武者」を人形に冠して、農耕儀礼だ
つた五月節句に転用し、床の間に安置
して祭り上げた。「裏切り」は、旧来
の「裏返り」と「手切れ」の切り貼
り細工だ。これらの造語を駆使して
事後法的道徳律を捏造したその上で、
秀秋をその鑄型に嵌め込んで強制流
布した。やがて捏造は言霊に化け、
秀秋悪評は物語から事実へ換わる。

志賀親善の消息は断片をつないで
推測した。我が祖が親善に従わずに
野に下った事情も不明で、実はこれ
ぞ個人的最大の謎である。

◆筆者紹介 しが ひでのり 81歳。
奈良県桜井市在住。

図書紹介

田部 修士(昭42年卒)

「祇園の女狐」

2011年12月29日PHP研究所
発行 1400円
著者：桜田 啓さん

前回「旅順に散った海のサムライ」広瀬武夫」を出された桜田さん(本名中島さん)の力作です。

井伊直弼の密偵・村山たかが物語の主人公です。尼となり数奇な運命を辿ったたかを慕う若い娘・松に、自分の過去を語るストーリーで話が展開します。

最後に、勝海舟が訪ねてくるくだりは堪りません。また、岡田以蔵が剣の修行に豊後岡藩を訪れた等々、随所に興味深い話が籠められています。



「悪名の旗」

1983年8月10日中央公論社
発行 当時1100円
著者：滝口 康彦



丸紅の辻相談役に図書を頂戴しました。岡藩の与力・田原紹忍が主人公で、随所に竹田が出てきます。

大友家の再興を願うストーリーが展開され、戦国武将があの手この手権謀術数の限りを尽くして行動する様子が描かれています。

後半の黒田如水との石垣原(別府)の戦がこの小説の山場です。

船村徹先生愛惜の名曲

「サンチャゴの鐘」を復刻

岡藩ゆかりの中川神社に伝えられてきた「サンチャゴの鐘」は、国指定重要文化財「銅鐘」として、市立歴史資料館

で保管公開されてきました。日本でも4つしかないキリシタンベルの一つとされ、表面には製造された年号を示す「1612」の刻印が見られます。

今年、この鐘が誕生して400年の記念すべき年です。

昭和48年に作詞家・横井弘氏、作曲家・船村徹氏という黄金コンビにより誕生した名曲「サンチャゴの鐘」。お二人が竹田市を訪れ、サンチャゴの鐘をモチーフに城下町の情感を込めて作られた愛惜の名曲です。

この名曲をリメイクし、世に送り出し、竹田の魅力を発信していきます。記念すべき復刻版は、この歌を最も熱い心で歌う船村徹先生ご自身の歌唱が実現しました。岡藩城下町400年祭のテーマソングとしても活用しています。

故郷への恩返し

名水の里に希望湧く

入田地区に企業進出が決定、2月8日広瀬知事立会いのもと祖峰企画(株)と、大分県庁において進出協定の調印式が行なわれた。祖峰企画(株)の田中征三社長(昭37年卒)は、入田のご出身で、竹田市の振興にと、祖峰中学校跡に工場を建設し、来年2月に操業を開始する予定。



左から3番目が「祖峰企画」の田中社長(昭37年卒)

訃報

慎んでご冥福をお祈り致します。

南方 俊 様 (昭16年卒)	没
田北 英治 様 (昭20年卒)	没
古賀 ハル子 様 (昭和39年卒)	没
小代 文喜 様 (昭35年卒)	没
後藤 忠 様 (昭11年卒)	没
進 正輝 様 (昭18年卒)	没
衛藤 宏子 様 (昭22年卒)	没

あ と が き

※「投稿」をお待ちしています。

この会報は会員皆様方の情報交換の場として編集しています。関東同窓会全員の方々の投稿を期待していますがその数が少なく苦労しています。お互いの交流の場としてぜひお活用下さい。

投稿内容

- ① クラス会情報
- ② 故郷の便り
- ③ 海外便り
- ④ 会員の語らい
- ⑤ 詩歌・文芸
- ⑥ 会員の催し
- ⑦ 会員消息
- ⑧ その他

連絡先

〒103-0027
東京都中央区日本橋1-15-1
日本パークライジング
田部 修士 宛
(広報委員長)

TEL 03-3278-4350
TEL 03-3278-4314
FAX 03-3278-4314

竹田会の案内

11月9日(金)に開催予定
アルカディア市ヶ谷にて
PM6時~8時

